

「江の島紀行(9)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

大学生の時、友人に熱烈な貝のコレクターがいて、よく一緒に江の島に行った。それを、「貝買旅行(かいがいりょこう)」と呼んでいた。今回も私一人だけ、その要素が非常に強かった。



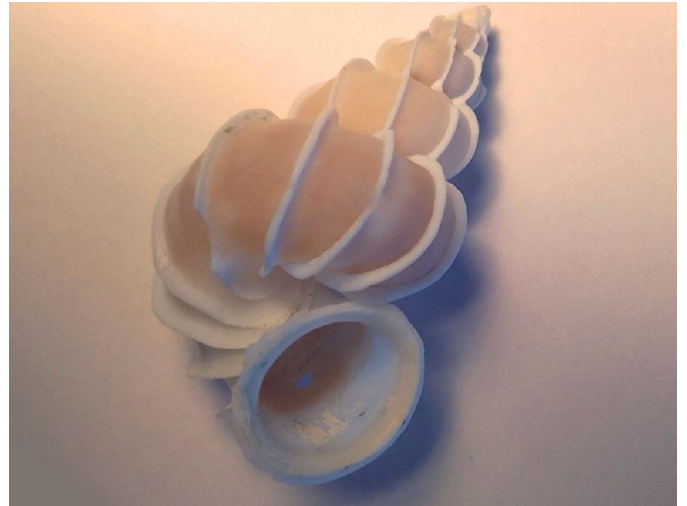
もう一つの目当ての貝は「オオイトカケガイ」という種類だ。少し前の62円切手に描かれていたので、記憶にある方も多だろう。

「チマキボラ」と並んで「世界一美しい貝」と称される貝だ。かつてはオークションで「数十万円」の値がついたが、現在は「数千円」で入手可能だ。

かつてはオークションで「数十万円」の値がついたが、現在は「数千円」で入手可能だ。



この貝も、現在江の島の売店ではほとんど見かけなくなった。貝を売っていきそうな店はすべて見たが、どこにも売っていなかった。あきらめかけていたが、一番最後の店を試しにのぞくと・・・あった! 「おおいとかけ ¥1,000」という値札がついている。即、お店の人に頼んでガラス戸棚から出してもらった。老店主は「以前は50個以上あった。これが最後の1個」という、霊験あらたかな台詞を用意していた。



やはりオオイトカケガイは美しい。蠟細工のような「もろい透明感」を持っている。切手に描かれた元の標本はこれではないかと思うほど、そっくりだ。貝の生体(軟体)は、誰にも教えられることもなく、この芸術品を創り上げるのだから驚きである。

貝殻の本来の役割は、内骨格を持たない貝類の体(軟体)を、衝撃や外敵から守ることである。硬組織の一種で「生体鉱物」とも言える。それらは、人間の目を楽しませる為に進化したわけではない。生物の形状やふるまいには、例外なく理由がある。しかしこの貝は、人が美しいと思う為に進化したとも思える。



オオイトカケガイは過去ほどではないにせよ、今でも高価な貝の一つだ。千円と破格だったのは、二つの理由がある。一つは、写真のように貝殻の一部に「欠け」があったこと。私は当然それを承知で購入した。もう一つは、貝の「パーツ」が完全には揃っていなかったこと。巻貝(腹足綱)の多くは、殻口に「蓋」を持つ。サザエの「蓋の裏側」にある「茶色い部分」に相当するものだ。それがついていなかったのだ。完璧な標本では、殻口に脱脂綿を詰めて、そこに「蓋」を貼り付ける形で販売している。種類によっては、この「蓋の有無」で価格が倍以上ちがう場合もある。